

三十周年記念論文集によせて

経済学部長 塩田 庄兵衛

わが立命館大学経済学部が、四年制の現行大学制度の発足とともに独立したのは、一九四九（昭和二四）年のことだから、今年で三十周年を迎えたことになる。いわば「而立」の齢に達したわけである。むろんその前史、すなわち一九〇三（明治三六）年に京都法政専門学校経済科設置にはじまる長い歴史があり、また一九六一（昭和三七）年には経営学部が分離独立するという大きな改革もあった。さらに学部教学を基礎に、大学院・経済学研究所が設置され、研究の後継者の育成にも努めてきた。

この間に、学部独立当初の専任教員二四名が現在では五十名に倍増したことをはじめ、量質ともに歩一歩と充実の度を増し、全国の大学経済学部のなかでも揺ぎない地位を築き得たといえよう。

さて、わが経済学部スタッフにとっての学問的訓練の道場として、またその成果を世に問う公式の機関としての役割を果たしてきたのが本誌『立命館経済学』である。その発行母体である立命館大学経済学会は一九五二（昭和二七）年一月に創立され、その機関誌として本誌が創刊された。「創刊にあたって」を故・末川博名誉総長が執筆され、本誌が『法と経済』を「基胎」として『立命館法学』と分化したものであることを指摘された。それ以来号を重ねて、本号を以て一六六号を発行するに至った。

いまそのバックナンバーのページを繰っていると、すでに物故された諸先輩もふくめ、多くの先輩・同僚の学問的営みをつうじて、そこに一つの歴史が刻まれていると同時に、大学院生諸君のフレッシュな論文もふくめて、わが学部独自の雰囲気ないしは学风が形づくられ、それが日々に発展しつつあることを感じる。

わが学部は去る十一月、創立三十周年を記念して学術講演会とささやかな祝賀パーティを催した。全学の祝福を受けて盛会であった。さらに、その記念行事の一環として、この論文集を編集した。期限やページ数の制約などで収録しえた論文は八篇にとどまったが、執筆者の年齢、論文のテーマなどは、わが学部の現状を反映するうえでバランスのとれた構成となり、記念号にふさわしい内容となったと考える。なお巻末に、学部三十年の歩みを記録した年譜を付録した。

世界と日本の経済が大きな変動期にさしかかっている現代は、経済学研究者にも時代が必要とする創造的研究活動の展開を改めて求めている。私たちは、三十周年を新たな出発点として、さらに前進に努めたい。そして本誌の編集・発行も、学界への寄与と学生諸君への学問的榮養の提供という課題を統一的に達成できるように工夫をこらしたい。